

ということになれば題詞に「姑大伴氏坂上郎女」とあることからしても、少くとも家持の周辺の人によってまとめられ、巻十七以後の四巻中の最も訓語の多い巻十九の中にある一音仮名によっていることは、万葉集編纂の際の資料としての表記は、このかたちであったと考えられる。四二二〇・四二二一につゞく二首即ち四二二〇から四二二三までの四首の前後は漢字仮名混用表記による。

以上、坂上郎女の歌の表記は、原作時に於る作者の表記という点とはかく、編纂の際のものとしては大体集中にみられるかたちであったと考えられる。

注4 春相聞の中の笠金村の歌、一四五三―一四五五

注5 一五八一―一五九一、一五九四、一六二七・一六二八

注6 (を) 卷三 乎矣烏緒雄 歌数二四七

卷四 乎呼尾矣雄男 〃 三〇九

卷六 乎雄矣尾 〃 一六〇

卷八 乎 〃 二四六

使用例の「に」と「と」を示す(「の」については注3に)

(一) 卷三 爾二国丹

卷四 爾二国丹於荷似

卷六 爾丹二国荷

卷八 爾二仁丹国於

(と) 卷三 跡登與等常共

卷四 跡常與登等澄

卷六 跡等迹登與

卷八 跡登常等與

ところで和歌の表記に万葉集の編纂に近い頃、漢字仮名混用による書き方と仮名のみによるものが、個人、それも当時の歌壇の中心に近くあった作家にあり、前者には訓仮名がかなり多く、後者には音仮名が用いられていたことが考えられることになる。ということになれば、漢字仮名混用の場合は仮名に於ても訓が多く用いられる、即ち、漢字の意味を利用しての表記であるということ通されているのであり、一方、一音仮名による表記は音によるのである。よって仮名表記の本質は一音仮名のみによる表記の方にあるべく、それがやはり同じ大伴氏の一人である旅人によってそのものが作られたとの推定がなされているのは別としても、その表記のあり方など、更に観察されなければならぬものと考えられる。

注7 土居光知「かな書き歌の系統」(土居光知全集第二卷一八九頁)

(五十八年十月)

この二組の間に於る仮名文字の種類相違は、用字体系を異にすることによるとみられる。即ち、同じ体系によるものであれば、AはBの一音仮名表記の一部を漢字で書いたということになるのであるから、仮名の文字の種類は一致する筈であるからである。ではこのことにはどんな事情が考えられるであろうか。

まず編纂に關係する次のようなことがある。卷三・四・六・八は作者や制作年代の重なるものが多いのであるが、卷三・四・六はそれぞれ雑歌・譬諭歌・挽歌、相聞、雑歌に分類され、卷八は四季に分けて更に各々を雑歌と相聞に分類し、大体に於て年代順に並べられている。即ち、編纂者の手が多く加えられているとみられるのである。そして、そこには、

(一) 重出——卷四の四八八・四八九と卷八の一六〇六・一六〇七
(二) 同時の作

イ、卷六の一〇二四―一〇二七と卷八の一五七四―一五八〇
ロ、卷六の一〇三七と卷八の一六〇二・一六〇三

などがあり、歌中にその季を示す語が存在しないのを題詞により入れたり、時期と四季の分類の異なるものなども見られるのであるが、いずれにせよ編纂の意識はかなり働いていたと考えてよいであろう。とすれば仮名の用字の面にも何らかの整理は行なわれなかったであろうか。重出の四八八・四八九と一六〇六・一六〇七の場合、題詞は同じで

君待登 吾戀居者 我屋戸之 簾動之 秋風吹 (四八八)

君待跡 吾戀居者 我屋戸乃 簾令レ動 秋之風吹 (一六〇六)
風乎太尔 戀流波乏之 風小谷 將レ来登時待者 何香將レ嘆

(四八九)

風乎谷 戀者乏 風乎谷 將レ来常思待者 何如將レ嘆 (一六〇七)

であり、登を跡に、之を乃に、登時は常思となつていたのであつて、トはいづれも訓仮名に、ノは正訓字を仮名文字に、シも使用例の多い文字となつてゐる。(二)の同時の作の二組については仮名に於て有意的と思われる差はなく、助詞の類に於てもヲの仮名が卷三に五種、卷四に六種、卷六に四種あるのが、卷八には乎のみとなつてゐるのを除けば、あまり問題にはならないようである。坂上郎女の歌の場合も同様に考へてよいであろう。更にその文字の種類が多いことは、それ等を區別して使用することもむづかしく、少くとも最後の編纂の際のかたちは保存されてゐるとみられると思われる。四八八・四八九と一六〇六・一六〇七の重出の歌については、伝誦歌として扱ふことが出来る類のものであるから、文字による固定はそれ程重くみることを必要としなかつたのではあるまいか。

次に卷十七・十八・十九に於るものについて、この巻にある六首はすべて一音仮名により、他の巻の歌とは趣を異にする。注意されることは全部が家持との關係のものであることである。即ち、三九二七・三九二八は家持が越中国守となり赴任する時に家持に贈つたもの、三九二九及び三九三〇は重ねて越中国へ贈つたもの、四〇八〇・四〇八一もやはり越中守である家持に贈り來つたものであつて、四二二〇・四二二一は家持の妻として越中にいる娘の大嬢に贈つたものである。

右によれば、卷三・四・六・八の漢字仮名混用による巻と、卷十七・十八・十九の一音仮名による巻との間に、その使用されている仮名の種類にかなりの相違があると思ななければならぬであろう。両者の間の歌の数は前者は後者の約九倍にも及ぶが、後者は全部が一音仮名によるので種類は多く、比較の対象となし得るものとしておく、次に前者をA、後者をBとしてその差をあげる。^{注2}

- か Aは種類が多く、Bにある加がない。
- き BにはAにある寸がない。
- け BにはAにある鶏がない。
- し Aは種類が多く、Bにある志がなく師・四がある。
- せ Aは勢、Bは世
- そ Aは曾、Bは蘇
- た AにはBにない田がある。
- て Aは手、Bは氏・天
- と Aは跡・常、Bは等登
- な BにはAにある名・莫がない。
- に Aは種類が多く、Bにある仁がない。
- の Aは乃の方が非常に使用例が多く、Bは能の方が多い。
- は Aは種類が多く、Bは一種のみ。
- へ AにはBにない戸がある。
- み Aには民・味・未がなく、Bには三・見がない。
- む Aは種類が多く、Bは一種のみ。
- め BにはAにある目が無い。
- も BにはAにある裳・藻がない。

- や Aには八が、Bには夜がある。
- ゆ BにはAにある湯がない。
- よ Aには四が、Bには欲がある。
- ら BにはAにある羅がない。
- り AにはBにある利がない。
- る BにはAにある留・類がない。
- を Aには緒・雄が、Bには遠がある。

総じて前者に種類は多く後者に少ないのであるが、それは後者は音仮名のみであるのに対し、前者には訓仮名が相当多く使用されていることによる。この外、前者にはその仮名の音のところに正訓字が使用されているのが多く見られる。

以上の傾向は使用度数の多い助詞のみをとってみても存在するのであって、又、卷十九に於る「の」の場合を除き、それぞれの巻の用字の傾向をも示している。^{注3}

注1 短歌の中には反歌が五首ある。題材からいつて長歌と一連のものとして扱うべきかとも思われるが、短歌の中には連作かと思えるものもあるので、考慮しないことにした。

注2 特色とすべき使用の少ないものは除く。

注3 各々の巻に於る「の」の使用数は次の通りである。

巻	三	四	六	八	十七	十八	十九
乃	一一五	六八	八九	一〇一	八六	七九	三七
之	一〇五	一一三	八五	一〇五	四	一	五三
能	一三	四	七	一四	八七	九七	四三

ヲ	エ	キ	ワ	ロ	レ	ル	リ	ラ	ヨ	ユ	ヤ	モ	メ	ム	ミ	マ	ホ	ヘ	フ	ヒ	ハ	ノ	ネ		
																	ホ・ボ	ヘ・ベ	フ・ブ	ヒ・ビ	ハ・バ				
乎					礼	留流					八・	毛聞母裳	目・	牟	美弥							(者)波	乃(之)		
乎緒	惠		和	呂	礼	流留	里	良羅	四呼與	湯	八也	毛裳母聞	目・	牟武六	三弥		戸倍					(者)波破羽齒。婆	(之)乃能	根	
乎雄						流		良				裳藻	目米	牟	弥		寶					毗	(者)波羽	(之)乃能	祢
乎				呂	礼	類流	里理	良	與	湯由		毛聞母裳	目・	牟武	美見								(者)波	及(之)能	
乎	惠				礼	流		良		由		毛母聞	米	牟	美未	麻	保	倍敵辺		比非悲		波婆	乃能		
遠			和				里利		欲	也夜	母毛		牟		麻万	保	へ倍	布敷	比			波	能	祢	
乎			和		礼	流	里理利	良	欲與	由	毛母		牟	美民弥味未	麻末	保	倍敵	布夫	比非			波婆	能乃	祢	

- 括弧は正訓字でその音の助動詞の意味に使われているもの。
- 。以下は濁音、・は訓仮名
- 清濁共に使用される仮名とされているものは清音とする。
- 順序は使用度数の多いものを先にする。

ヌ	ニ	ナ	ト ド	テ デ	ツ ヅ	チ ヂ	タ ダ	ソ ゾ	セ ゼ	ス ズ	シ ジ	サ ザ	コ ゴ	ケ ゲ	ク グ	キ ギ	カ ガ	オ	エ	ウ	イ	ア	
	尔	奈	跡	(而)	都						之思	左	家鷄	久	寸	可							卷三
奴	尔 二 丹 荷	名 莫 奈	跡 常 與 十	(而) 手		田 曾 十			須	師 四 之 思 士	左 射	許 期	家	久 苦 具	寸	(之) 可 鹿 我						阿	卷四
	尔 二	奈 七	跡	(而)				曾		之 師	佐 左 沙 射		鷄	久 具		。我 (之)							卷六
奴	尔 二 丹	莫 奈	登 常 杼	(而) 手	都	多	曾	勢	須	思 之	佐	許	鷄 家	寸 伎 吉	(之) 可 奇 香 我							卷八	
奴	尔 仁	奈	等 登	氏	都	知	多	世	須	思 之 志	左 佐	古 孤 許 其	家 氣	久 具	伎 吉 藝	加 可 我	於	要		伊	安	卷十七	
奴	尔	奈	登 等	豆 天	都		多	世	。受	之 事	故		久	可 加	於		宇	伊	安			卷十八	
奴	尔 仁 耳	奈	等 得 騰	氏	都 豆	。地	多 太	蘇	世	須	之 志	左 佐 謝	古 許 故	氣 宜	久	伎 吉	可 我	於 意	延	宇	伊	安	卷十九

大伴坂上郎女の用字

——助詞の類の仮名表記にみる——

中村直子

(児童教育学科・初等教育)

万葉集の表記については多くの研究がなされてきているが、その整理について他に手掛かりとされるものはないであろうか。異なった用字体系によるものを一律に扱ってまとめてみても、その性格について知り得ることは少ないと考えられる。集中の表記の多様さには、原作者・筆録者・編纂者など、更にその各々の中に於ても相違の存在する場合のあること等によるものがあると思われるが、その作者の一例として大伴坂上郎女についてみる。

大伴坂上郎女は、万葉集編纂の中心的存在とみなされている大伴家持の作家生活に、大きな影響を与えたと考えられており、所収歌数も多い。又、集中第三期に属しているのでその表記の性格をうかがい得ることも比較的あつて、その周囲の事情からして原表記に近いものも存在するかとも思われる。更に女性であることは教養などに於る特殊なもののみられる場合も考えられるであろう。

用字の個人的なものについては、人麻呂歌集に於る、巻五の憶良と旅人、又家持と池主の間などに存在することがいわれているが、いずれにせよ漢字の音訓混用表記によるものが多きを占め、しかも短詩型

で内容・題材の広きにわたる場合の比較の対象としては、使用頻度が高く、同一のことばとしての意識の強いものによることになり、これにあたるものとして助詞・助動詞・活用語尾の類があげられる。そしてこれ等は多く一音仮名によっている。しかし一面この性格は編纂・転写などの際には変えられて統一されやすいことになるが、最も使用率の高い助詞の例を集中にみてもその文字には、

に 爾 二 丹 荷 邇 於 国 君
を 乎 叫 矣 呼 袁 遠 男 尾 雄 緒
と 等 跡 登 常 與 得 迹

の如く、かなり多くの種類がある。よつて一応扱い得るものと考えることが可能である。尚、これ等の語は漢文的表記により生み出されるもの、読み添えにそれを要求するものがあるのであるが、訓の問題もあり含んでおくにとゞめざるを得ない。

坂上郎女の作は集中八十四首

卷三 六首 卷四 三十九首
卷六 十一首 卷八 二十首
卷十七 四首 卷十八 二首
卷十九 二首

以上の巻十七以下の八首は家持及び大嬢に贈ったもので一音仮名に、他はいずれも集中多くの表記がとる漢字の訓読と仮名とによる。又、巻三・四・六・十九には長歌が計六首、巻四には旋頭歌が一首、含まれている。^{註1}

次に使用されている仮名を、品詞その他を考慮せずに巻別に全部あげる。